

2.2. スイス最高峰 MonteRosa 山塊主峰 4634m (2000年8月)

「Dufourspitze 登頂」

高度：4634m、スイス最高峰

日時：2000年8月2日（水）午前九時

天候：雪・風、雲量 100%

Guide：Milan Sekelsky



初の 4000m 峰 スイス最高峰 Dufourspitze, 4634m に立つ (2000-8-2)

二年前、オーストリア最高峰の Grossglockner (3798m) に登頂し感激した [1]。富士山を超えて高い山への憧れは終わったかと思っただが、昨年大晦日に再燃した。西暦 2000 年に因み、60 という節目の年齢を迎える自分と同期の友へのメッセージとして思い出になることをしたいと考え付いたのが 4000m 峰挑戦だった。



幾つかの候補を考えた末、スイス Monte Rosa 山塊の Dufourspitze (4634m) を目標に選んだ。理由は：(1) スイスの最高峰であり¹、あの Matterhorn より高く、より易しいこと、(2) Mont Blanc に次ぐヨーロッパ第二峰であること、そして (3) Monte Rosa の名の響きに魅せられ、(4) あのエベレストの半分の高さを越えていること、であった。

Grossglockner との高度差 800m 余は高地順応と言う新しい課題を意味した。4200–4300 m の高度から殆どの人に多かれ少かれ高地順応の問題が発生することをオーストリア山岳会会報で知った。私には初めての高度である。勿論、温度条件や雪の状態はより過酷になる。

Grossglockner に登った二年前からは体力の低下を感じていた。トレーニングのためのジョギングは頻度も距離も落ちていた。それに代わる準備として国連ハイキングクラブやオーストリア山岳会のやや厳しい山行計画に年始めから雪山を含めて積極的に参加した。30 階建て国連ビルの階段 550 段を昇るのも体力作りに取り入れた。

この六月、下見に Zermatt を訪れ、Gorner 氷河を渡って Monte Rosa Hütte (2800m) まで行った。まだ雪の季節でガイドを必要とした。が、ガイドから新しい登頂ルートを知り興味が湧いた。Klein Matterhorn から幾つかの 4000m 峰を三日間で縦走²して Dufourspitze に至ると言うのである。これはより面白そうだ、と気持ちが傾いた。

二年前の Grossglockner の時と同様、幾つかの書き置きをして 7 月 28 日の夜行で雨のウィーン西駅を出た。翌朝早く Zürich に着いた時も雨が落ちていたが、二、三日高地順応をしている間に天候は好転するだろうと楽観していた。

昼過ぎ Zermatt に着きガイド協会を訪れると、高地訓練のため早速 Breithorn 山行に翌日参加しろと言う。既に 4000 m 峰だ。天候は急速に回復していたが Matterhorn は未だ雲の中だ。

翌 7 月 30 日は快晴で始まった。Matterhorn には雲一つない。見事なものだ。形が良い。こんな険しい山にどうして登れるのだろうか。少なくとも俺の領域じゃないと思う。同行の仲間とガイドに登山ケーブルの谷駅で合流したのは朝の 7 時半、3820m の Klein Matterhorn 駅に昇ると一面の雪、登山者以外にスキー客の多いのが目に付いた。



アイゼン・サングラス・手袋を付け、ザイルで連結して雪道を歩き出す。高地の所為かやや息切れを感じる。少し歩いただけで脈拍は 100 位に跳ね上がる。しかし、雲一つない紺碧の青空がそれを忘れさせる。約 1.5 時間で Breithorn 頂上 (4165m) に着く。温度は零度前後か。風もない。360°の素晴らしい眺望。西には Matterhorn (4477m) や Mont Blanc (4807m)、南にはイタリアの Gran Paradiso (4061m)、北には Dom (4545m)、そして東には目指す Monte Rosa の **Dufourspitze** (4634m) が待っている(←)。六月に歩いた Gorner 氷河が遥か下に広がっている。

¹ Matterhorn (4478m) がスイスアルプスの最高峰だと思っている人が多い。が実際の最高峰はその東数マイルに位置するこの Dufourspitze (4634m) である。また、この Dufourspitze はスイスとイタリア両国の最高峰と言われることも有るが、頂上は国境から 160m 西側つまりスイス側にある。また始めてスイスで高精度の地図を作成した Dufour 将軍に因んで名付けられた山("Dufour Peak")として知られている。

² Breithorn, Pollux, Castor, Lyskamm, Ludwigshöhe, Parrotspitze, Signalkuppe, Zumsteinspitze

多くの 4000m 峰が軒を連ねる。息を呑む。遠景からは 4000 m 位から上の山だけが真夏でも白い雪を冠っていることが良く分る。

午後 Zermatt (1600m)に戻ると軽い頭痛は消えた。仲間の一人は翌日まで頭痛が続いていた。高山症状は人に依る。最良の治療は早く低地に降りることなのだ。

7月31日は高地訓練の二日目。今日も快晴。朝焼けの Matterhorn は言葉にできない美しさだ。この日も Klein Matterhorn 駅まで登山ケーブルで登ってからさらに遠くの高い Castor (4226m)へ行った。素晴らしい眺望を楽しむ。夕方ガイド協会に戻って少々失望。と言うのも、天候悪化で Dufourspitze への縦走プランは無理、Monte Rosa Hütte からの日帰り計画にしろと言う。折角挑戦気分になっていたのにと思ったが妥協する。危険は避けたい。

翌8月1日、コース最低地の Gorner 氷河 (2550m)を渡って Monte Rosa Hütte まで移動。天候は相変わらず良く、岩の上で昼寝を楽しんでいるとドドーンと音が聞こえた。他の客のざわめきに起き上がると Lyskamm (4527m)の中腹で崩れ落ちる雪の塊と舞い上がる雪煙が見えた。雪崩としては中規模か。雪崩を直に目にしたのはこれが二度目。幸い登路とは方向が違う。目標の Dufourspitze は小屋からは見えない。夕刻中年のガイドに会い、装備を点検。七時からの夕食はデザート付きの立派なもの。明日は早いと早々に床に就いた。

夜半多少の問題³はあったものの、8月2日は朝一時に起床。一人外に出ると空は一面の星。北斗七星も北極星も銀河もくっきり。静寂の星明かりの中で山並みがシルエットのように連なり、Matterhorn はさながら黒いピラミッドだ。十年ほど前の北アルプス常念小屋の朝を思い出す。コッヘルでラーメンを作りながら星空を走る流れ星を見ていた。今朝は流れ星の代わりに小さな灯が Matterhorn の頭上をかすめるようにして東の空から西に消えていった。飛行機か人工衛星か。夜空がロマンを感じさせる。

午前二時、朝食を済ませ、ヘッドランプを点けて小屋を出る。何組かのパーティが同時だ。何れも若い二、三人組。出てすぐ彼らには置いて行かれる。

午前三時、Monte Rosa 氷河 (3200m) 取っ付きでアイゼン装着。未明の雪面は締まっていてアイゼンの爪が気持ち良く利く。勾配が次第に立ってくる。それにつれて足も重くなる。一步一步高度は稼ぐがエネルギーも確実に消耗する。中年パーティの足は遅れ勝ちになる。何組かのパーティに抜かれる。

午前六時、高度 4000m に達する頃、朝焼けが始まる。振り向くと紅く染まった Lyskamm や Matterhorn が美しい。写真に思うが、ガイドは「先を急ぐ、天候が下り坂だ、頂上の雲を見ろ」とつれない。なるほど、先ほどまで丸坊主だった頂に小さな雲がたなびいている。

午前七時、峠の Sattel (4350m) は濃い霧と雲の中だった。携行食を口にするが既に疲れで唾液が出ない。乾し納豆は噛むだけで呑み込めずに吐き出す。小休止の合間にガイドが言う。「ここから二時間注意深く登れ。道は険しいし狭い、一歩間違えると滑落だ。」

足元と岩場に神経を集中していて緊張で頂上に着くまで気付かなかったが周囲は風と雪だった。最後約 200m の登りはピッケルも放棄して三点支持の四つ足登行だ。8:50 頂上に着いて始めて、寒さと気の緩みで震えてきた。温度はマイナス 10°C 位か。視界は悪い。今日まで天候がもつとのことだったのにと悔やむ。頂上は広くない。十人位で一杯だから、北アルプス槍ヶ岳の上より狭い。小さなマリア像だけがある。登山者数人。尾根の向こう側からの縦走組もいる。写真数枚。

親しい知人や家内へ山頂から電話をと目論んでいたが残念ながら携帯が機能しない。約二十分後下山開始。下山は登りより危険で技術的にも難しく集中力が要求される。再び、寒さも雪風も意識できない緊張の一時間。上からガイドがザイルで確保してくれる。天候が悪く視界が利かないことは恐怖感を和らげる効果がある。途中でピッケルを回収して午前十時、Sattel に帰り着く。ほっとして、再び寒さと震えを感じず。アイゼンをはずす。あとは小屋に帰り、Zermatt に戻るだけだと安堵する。



³ 中では三人合唱の轟々たるいびき、外では建国記念日八月一日を祝う雷鳴の如き連発花火。

ところがどっこい、まだ終りではなかった。ガイドは弾丸列車のように雪面を降りていく。この高度で雪なら下は雨、濡れたくないのはこちらも同じとザイルにつながれて転がるように必死について降りる。が、疲れで膝が言うことをきかない。何度か転ぶ。ついに音をあげて「ペースを落として」と頼む。登り四時間の雪道を彼は実に一時間で駆け下りた。氷河の下端に辿り着いた時は既に疲労で困憊だ。間もなく雨は止み、陽射しさえ出る。さらに一時間、石道をよたよたと降りて正午過ぎ Monte Rosa 小屋に戻る。冷たいビールが値千金だ。濡れた靴や衣類を陽射しの中で乾す。

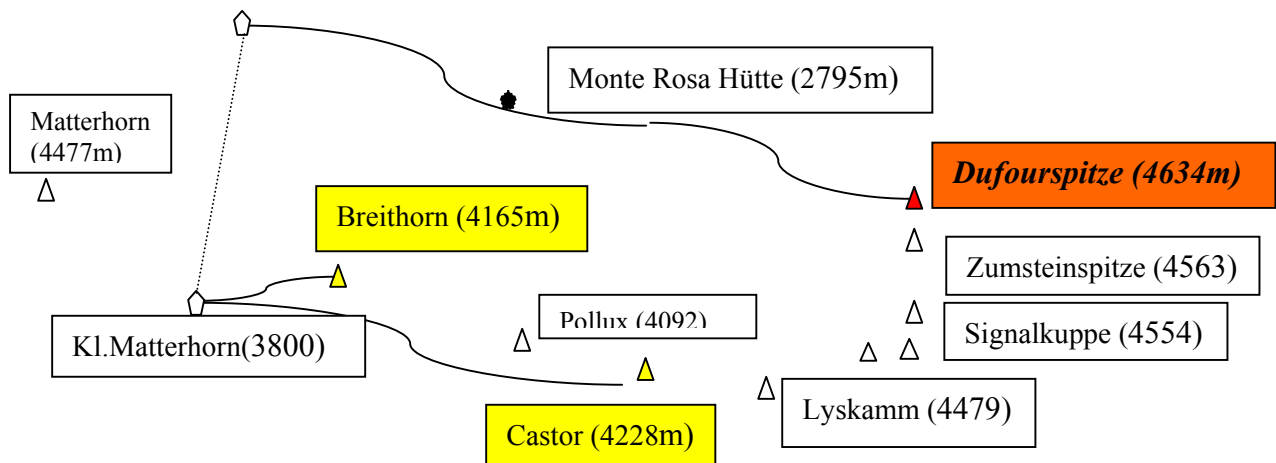
話はまだ続く。下山にはさらに 2.5 時間歩かねばならない。疲れた体は前に出ようとしませんが、無事に下山したことを今日中には電話で日本に知らせたいと焦る。一時間休んで小屋を出る。氷河まで約 300 m 降り、横切って再び 300 m 登る⁴。時に雨の落ちる中をひたすら歩く。振り向くと Monte Rosa も Lyskamm も中腹から上は雲に覆われている。上は雪だろう。登山電車の駅 Rotenboden に辿り着いて深呼吸。Zermatt に戻ると午後 4:30 (日本時間午後 11:30) だった。Zermatt に居合わせた親友の井上さん一家とホテルの女主人が夕食で祝ってくれた。その夜はこの数日の景色やこのあと書くことになる登頂記の構想をぼんやり考えながら十時間余りの睡眠を楽しんだ。

翌日は時に激しく雨の降る天候だった。ガイド協会で昨日の登山コースを確認し、登山証明書の郵送を依頼。日本人で溢れる Zermatt の街を記念になる土産を探して歩く⁵。ホテルに戻って友人や自身に絵ハガキを書いて夜行列車で Vienna⁶ に戻った。

スイス最高峰、Mont Blanc に次ぐヨーロッパ第二峰、Everest の半分の高さを越える Dufourspitze (4634m) への私の旅はこうして 2000 年 8 月 2 日午前 9:00 に達成した⁷。

Reference:

- [1] I finally climbed the Grossglockner, ECHO No.199
- [2] Viertausender der Alpen, Bergvertrag Rother
- [3] 1000 Gipfel der Alpen, Weltbild Verlag
- [4] Monte Rosa und die suedlichen Taeler, Berge Nr.61, Olympia-Verlag



⁴ 氷河はここでも退行している。Monte Rosa Hütte が建つた頃は Gorner 氷河の縁だった筈。Grossglockner 麓の Franz-Josefs Höhe と Pasterze 氷河の関係 (高低差 200m) と同じだ。

⁵ Zermatt は Matterhorn、Monterosa 双方への出発点である。Matterhorn が余りに有名なため「Matterhorn にあらざれば山にあらず」の感である。土産物は Matterhorn 一色であり Monte Rosa のものはない。私は Monte Rosa 名入りの T-shirt を懸命に探したが見当たらなかった。

⁶ 家内には事前に登山計画を打ち明けておいた。二年前の Grossglockner 登山の時は事前に断らなかったもので随分心配したらしい。

⁷ 次は Mont Blanc かと多くの人に聞かれる。どうなることか。決めてはいない。

(登頂記への反響から二件)

素晴らしい登頂報告を有り難う御座いました。数年前に家族4人でスイス旅行したときに行った Klein Matterhorn 駅等という名前が出てくると流石に懐かしく、あのとき見た登山者のように小西さんはあの道を登られたのかと、何となくその姿が目浮かぶような心地がして、多少の現実感と共感を持って報告書を読むことが出来ました。「多少」などと書かれるのは迷惑でしょうが、山登りをしない者のせめてもの背伸びの姿と思ってご勘弁下さい。

前回のメールで私の妙な感嘆を伝えて小西さんを戸惑わせたようですが、今回、この報告を読みながらやはり素晴らしいと改めて感嘆しました。そちらに居る頃にはあまり感じなかった体力の衰え、それも特に手足の筋肉の衰えを強く感じるようになっていた我が身に比べ、さして年も変わらない小西さんが4634メートルの山に登られた事は、正直に言えば、私にとってはそれは素晴らしいよりも羨ましいよりも実は妬ましい事なのです。

と、妬んでいても仕様がありません。前向き姿勢に立ち戻って、今年の秋は山地を散策しようと妻と話し合っている所です。立派なトレッキングシューズもあり、妻には高価なそれ用の杖もあります。未だ数回しか使っていません。幸い時間は幾らでもあります。小西さんのように名のある山を目指すことはありませんが、忘れていた山の空気を吸いに行ってみたいと思います。

小西さんの快挙は、引込み思案に成った我々の気持ちをちょっと前に押し出してくれました。有り難う御座いました。(平成12年9月1日、猪川 浩次)

登頂記、ありがとうございました。おめでとうございます。とは言っても、この登頂記を読んでも、小西さんの写真を見ても、信じられぬ思いです。私の知っている小西さんの双生児の話でないのかと。地下鉄の階段を上っても息切れする人には、自分の知人に、そのような人がいるなんて、しかも、余りこの種の話聞いたことがなかったので、某登山家のエッセイを読んでいるという実感でしょうか。

等しく24時間神から時間をもらいながら、それを日々使う密度の重さと、濃度について、改めて認識させられました。割合近くに、こんなにグレイトな人が存在していたなんて！！

全体的に淡々と記してありますので、凄さがより浮き上がるのかもしれませんが。

私の味わえ得ない感動と美を味わっていらっしゃるのですね。

長くなりました。またの挑戦記はいつのことでしょう。エールを送りつつ、見守らせて頂きます。

(2000年9月2日、水上 幹子)